

## 博士論文（要約）

論文題目 平安時代における変体漢文の日本語学的研究

氏名 田中 草大

東京大学大学院人文社会系研究科 博士学位論文（要約）

論文題目

平安時代  
における

変体漢文の日本語学的研究

氏名 田中 草大

日本文化研究専攻 日本語日本文学専門分野（国語学）

平成二十七年三月 博士課程単位取得退学

## 目次

### 序論

#### 第一章 変体漢文の概要

##### 第一節 はじめに

##### 第二節 定義

##### 第三節 資料

##### 第四節 歴史

##### 第五節 特徴（一）和習

##### 第六節 特徴（二）記録語

##### 第七節 変体漢文の理論的分類

##### 第八節 変体漢文はヨメるか

#### 第二章 研究史と本研究の観点

##### 第一節 近年の研究動向

##### 第一項 表記

##### 第二項 語彙

##### 第三項 文法

##### 第四項 敬語

##### 第五項 文体

##### 第六項 音韻

##### 第七項 資料

##### 第八項 そのほか

##### 第二節 先行論の空隙と本研究の観点

#### 付章 橋本進吉による「変体漢文」の定義と古事記の位置付け

##### 第一節 術語「変体漢文」の源流

##### 第二節 橋本進吉の「漢文」と「変体漢文」

##### 第三節 橋本の「変体漢文」と古事記の所属

##### 第四節 まとめ

本論

第一部 語彙より見たる変体漢文の性格（一）——文体間共通語への着目——

第一章 問題の所在と本部の手法

第二章 オドロク（驚）の語義・用法

第一節 和文

第二節 漢文訓読文

第三節 変体漢文

第四節 まとめ

第三章 アソブ（遊）の語義・用法

第一節 和文

第二節 漢文訓読文

第三節 変体漢文

第四節 まとめ

第四章 ヒサシ（久）の語義・用法

第一節 和文

第二節 漢文訓読文

第三節 変体漢文

第四節 まとめ

第五章 ワヅカナリ（僅・纔）の語義・用法

第一節 和文

第二節 漢文訓読文

第三節 変体漢文

第四節 まとめ

第六章 サカリナリ（盛）の語義・用法

第一節 和文

第二節 漢文訓読文

第三節 変体漢文

第四節 まとめ

第七章 オク（置）の語義・用法

第一節 中間総括

- 第二節 和文
- 第三節 漢文訓読文
- 第四節 変体漢文
- 第五節 まとめ
- 第八章 分析結果と資料間の性格相違
  - 第一節 文体間共通語の分析結果
  - 第二節 文体間共通語から見る資料間の言語的性格の相違
  - 第三節 結論
- 使用テキスト及び索引

第二部 語彙より見たる変体漢文の性格 (二) — 漢文訓読語的部分への着目 —

- 第一章 問題の所在と本部の手法
- 第二章 変体漢文における〈訓点語〉の用法 (一) スミヤカナリ(速)
  - 第一節 本章及び次章の問題意識とアプローチ
  - 第二節 漢文訓読文
  - 第三節 変体漢文
  - 第四節 和文
  - 第五節 まとめ
- 第三章 変体漢文における〈訓点語〉の用法 (二) タヤスシ(輒)
  - 第一節 漢文訓読文
  - 第二節 変体漢文
  - 第三節 和文
  - 第四節 本章のまとめ
  - 第五節 前章及び本章のまとめ
- 第四章 接尾辞「等」の訓法と用法
  - 第一節 変体漢文における接尾辞用法の「等」の訓法
  - 第二節 用法等の確認
    - 第一項 中古の和文
    - 第二項 中世の和漢混淆文
    - 第三項 中古の変体漢文

第三節 まとめと課題

付節（一） 〈列挙〉のラの出自

付節（二） 先行研究の概観

第五章 助動詞用法の「欲」の訓法と用法

第一節 変体漢文の言語とその訓法

第二節 「欲」の訓法研究史

第三節 調査及び考察

第一項 将然の例

第二項 願望の例

第三項 人称

第四項 切れ続き

第四節 まとめ

### 第三部 表記より見たる変体漢文の性格

第一章 問題の所在と本部の手法

第二章 変体漢文における不読字―段落標示用法を中心に―

第一節 はじめに

第二節 変体漢文における不読字二類

第三節 段落標示用法の「矣」の消長

第四節 段落標示用法の「矣／焉」「焉／矣」の消長

第五節 出自など

第六節 おわりに

第三章 仮名文から変体漢文への「変換」の過程

第一節 変体漢文の表記を研究する方法

第二節 形成論的研究と変換表記体資料

第三節 変換文書

第四節 変換文書の実例と概観

第五節 概括と考察（一）真仮名が交じる要因

第六節 考察（二）そもそも何故変換できるのか……文体と表記体

第七節 結語

## 付論

尾張国解文は文書なりや典籍なりや — 変体漢文資料の文体的解析・試論 —

### 第一節 目的

### 第二節 語学的な不審点

#### 第一項 修辭的観点

#### 第二項 表記的観点

#### 第三項 語彙的観点

### 第三節 結論及び課題

## 付録 尾張国解文の漢字句（抄）

## 結論

### 第一章 本研究のまとめ

#### 第一節 本研究から見えてくること（一）漢文という枠とその内側

#### 第二節 本研究から見えてくること（二）他文体との関係

#### 付 節 後藤英次氏の御批判にこたえて

### 第二章 課題と展望

#### 第一節 文体と表記体

#### 第二節 変化・変異への検証の深化

## 初出一覧

五年以内に出版予定である。

本  
文



## 参考文献一覧

### 【序論第一章】

- 赤尾利弘（二〇〇〇）「近代の諸資料に由る候文の命脈——資料紹介 その二——」『亜細亜  
大学教養部紀要』六十二
- 沖森卓也（二〇〇九）『日本古代の文字と表記』吉川弘文館
- 小山登久（一九九六）『平安時代公家日記の国語学的研究』おうふう
- 亀井孝（一九五七）「古事記はよめるか——散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の  
問題——」武田祐吉編『古事記大成3 言語文化篇』『亀井孝論文集4 日本語のす  
がたところ（二）』（吉川弘文館、一九八五年）にも収録。
- 木田章義（二〇一四）「狸親父の一言——古事記はよめるか——」『国語国文』八十三ノ九
- 金水敏（二〇一一）「言語資源論から平安時代語を捉える——平安時代「言文一途」論再考  
——」『訓点語と訓点資料』一二七
- 後藤英次（二〇一六）「中世後期以降の古記録（日記）資料を日本語史的に扱う際の視  
点」『中京大学文学会論叢』二一
- 小林芳規（一九七二）「高山寺本古往来における漢字の用法上の性格——振仮名の有無を手  
懸りとする考察——」『国文学攷』五十七
- 小林芳規（一九八二）「古事記訓読について」青木和夫ほか校注『日本思想大系1 古事  
記』岩波書店
- 小松英雄（一九七三）『国語史学基礎論』笠間書院
- 小松英雄（一九九八）『日本語書記史原論』笠間書院
- 佐藤喜代治（一九六六）『日本文章史の研究』明治書院
- 築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 築島裕（一九七二）「高山寺本表白集の研究」高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺本古往  
来 表白集』東京大学出版会
- 中田祝夫（一九五四）『古点本の国語学的研究』講談社（改訂版は勉誠社、一九七九年）
- 堀畑正臣（二〇〇七）『古記録資料の国語学的研究』清文堂
- 船城俊太郎（二〇一一）『院政時代文章様式史論考』勉誠出版
- 真下三郎（一九七四）「日本書翰文体史 三——候文体——」『甲南女子大学研究紀要』十
- 峰岸明（一九八六イ）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会
- 峰岸明（一九八六ロ）『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版
- 峰岸明（二〇〇三）「古記録の文章における表記とその言語」『国語と国文学』八十ノ一
- 矢田勉（二〇一一）『国語文字・表記史の研究』汲古書院
- 山本真吾（二〇〇六）『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古書院

山本真吾(二〇〇八)「変体漢文해독의 방법과 실제 — 変体漢文 訓点資料의 諸相 —」『韓國文化』四十四

【序論第二章】

遠藤好英(二〇〇六)『平安時代の記録語の文体史的研究』おうふう  
小山登久(一九九六)『平安時代公家日記の国語学的研究』おうふう  
後藤英次(二〇一二)「中世以降の古記録の日本語学的研究 序説」『中京大学文学部紀要』四十七ノ一

後藤英次(二〇〇〇)「記録特有語の口頭語化について — 中世後期口語資料の検討から —」  
遠藤好英編『語から文章へ』

後藤英次(二〇〇二)「中世前期口語資料における記録特有語 — 記録特有語と口語資料 (一) —」『中京大学文学部紀要』三十六ノ三・四

後藤英次(二〇一五)「平安時代の記録体の言語の基盤に日常口頭語があるとはどういうことか」『中京大学文学論叢』一

後藤英次(二〇一六)「中世後期以降の古記録(日記)資料を日本語史的に扱う際の視点 — 主に中世末期以降の公家日記の場合 —」『中京大学文学論叢』二

築島裕(一九六三)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会  
築島裕(一九六九)『平安時代語新論』東京大学出版会

原裕(一九九八)『御堂関白記』自筆本の誤記例からみた十一世紀初頭の日常字音』『中央大学大学院研究年報 文学研究科篇』二十七

富士池優美(二〇一六)「文が長くなる要因 — 「尾張国解文」を例に —」『国語語彙史の研究』三十五

堀畑正臣(二〇〇七)『古記録資料の国語学的研究』清文堂出版  
松下貞三(一九八七)『漢語受容史の研究』和泉書院

峰岸明(一九八六)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会  
峰岸明(一九八六)『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版

三保忠夫(二〇〇四)『古文書の国語学的研究』吉川弘文館  
山口仲美(一九九八)『平安朝の言葉と文体』風間書房

山口佳紀(一九九三)『古代日本文体史論考』有精堂出版  
柳原恵津子(二〇一一)「記録体における動詞の用法について」第一〇五回訓点語学会研究発表会配布レジュメ

柳原恵津子(二〇一二)「自筆本『御堂関白記』に見られる複合動詞について」『中央大学文学部紀要 言語・文学・文化』一〇九

山本真吾(二〇〇六)『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古書院

【序論付章】

- 乾善彦（二〇〇五）「擬似漢文の展相」『国語文字史の研究』八  
冲森卓也（二〇〇〇）『日本古代の表記と文体』吉川弘文館  
亀井孝（一九八九）「日本語（歴史）」『言語学大辞典（二）世界言語編（中）』三省堂  
神野志隆光（二〇〇七）「漢字と非漢文の空間——八世紀の文字世界——」東京大学教養学部  
国文・漢文学部会『古典日本語の世界 漢字がつくる日本』東京大学出版会  
小松英雄（一九九八）『日本語書記史原論』笠間書院  
藤本灯・田中草大・北崎勇帆（二〇一六）「山田孝雄の未刊稿『日本文体の変遷』——附『院  
政鎌倉時代文法史』『院政鎌倉期の語法』——」『日本語の研究』十二ノ四  
峰岸明（一九八六イ）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会  
峰岸明（一九八六ロ）『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版  
毛利正守（二〇一四）「変体漢文」の研究史と「倭文体」『日本語の研究』十ノ一  
山口佳紀（二〇〇五）『古事記の表現と解釈』風間書房

【第一部第一章】

- 大野晋（一九七四）『日本語をさかのぼる』岩波新書  
ジスク・マシュー（二〇〇九）「和語に対する漢字の影響——「写」字と「うつす」の関  
係を一例に——」『漢字教育研究』十  
ジスク・マシュー（二〇一〇）「意味の上の漢文訓読語——和語「あらはす」に対する漢字  
「著」の意味的影響——」『訓点語と訓点資料』一二五  
ジスク・マシュー（二〇一二）「啓蒙表現における漢字を媒介とした意味借用——和語「あ  
かす」の意味変化過程における「明」字の影響——」『国語文字史の研究』十三  
築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会  
峰岸明（一九八六イ）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会  
峰岸明（一九八六ロ）『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版  
山口仲美（一九九八）『平安朝の言葉と文体』風間書房  
山口佳紀（一九九三）『古代日本文体史論考』有精堂出版  
山田孝雄（一九三五）『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』宝文館、一九七〇年復刻  
版  
山本真吾（一九九三）「平安時代に於ける動詞「をしふ（教）」の意味用法について——訓  
点資料の用法に注目して——」『訓点語と訓点資料』九十二  
山本真吾（二〇〇六）「平安時代に於ける「しきり（頻）」の意味用法について——その文  
体的意義特徴、漢文訓読を要因とする二型情態副詞の形容動詞化の問題など——」『国  
語学叢書』二十五

【第一部第五章】

峰岸明（一九八六）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

【第一部第六章】

大坪併治（一九七六）「訓点語の翻訳文法」『大坪併治教授退官記念国語史論集』表現社、のち『国語史論集 上』（風間書房、一九九四年）にも収録

山田孝雄（一九四〇）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館

【第一部第七章】

高橋久子（二〇〇九）「割置考」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅰ』六十

柳原恵津子（二〇一二）「自筆本『御堂関白記』に見られる複合動詞について」『中央大  
学文学部紀要』二三九（言語・文学・文化 一〇九）

【第一部第八章】

遠藤好英（二〇〇六）『平安時代の記録語の文体史的研究』おうふう

亀井孝（一九五七）「古事記はよめるか——散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の  
問題——」武田祐吉編『古事記大成3 言語文化篇』『亀井孝論文集4 日本語のす  
がたとこころ（二）』（吉川弘文館、一九八五年）にも収録。

小松英雄（一九九八）『日本語書記史原論』笠間書院。二〇〇〇年補訂版

【第二部第二章】

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

峰岸明（一九八六イ）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

峰岸明（一九八六ロ）『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版

山口佳紀（一九九三）『古代日本文体史論考』有精堂出版

山本真吾（一九八七）「今昔物語集に於ける「速」の用法について」『鎌倉時代語研究』  
十一

山本真吾（二〇一五）「訓点語」と漢字仮名交じり文」第一一一回国語語彙史研究会配

付資料

【第二部第三章】

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

中田祝夫（一九五四）『古点本の国語学的研究』講談社（改訂版は勉誠社、一九七九年）

松本光隆（一九八六）「東大寺図書館蔵極楽遊意長承四年点」『鎌倉時代語研究』九

【第二部第五章】

于康（一九九六）『古事記』に於ける「将」「欲」の用字法』『広島大学教育学部紀要』

第二部四十四

宇都宮啓吾（一九九四）「天理本『日本往生極楽記』の訓法に就いて——文章の性格から観

た和化漢文訓点資料の訓法に関する一考察——『鎌倉時代語研究』十七

宇都宮啓吾（一九九六）『本朝文粹』訓読における文章様式と訓法との相関性について

——久遠寺本を手懸かりとして——『大谷女子大学国文』二十六

大坪併治（一九八一）『平安時代における訓点語の文法』風間書房

門前正彦（一九六三）「漢文訓読史上の一問題（五）——「欲」字の訓について——」『訓点

語と訓点資料』二十五

小林芳規（一九五九）「花を見るの記」の言い方の成立追考』『文学論藻』十四

小林芳規（一九六七）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会

小林芳規（二〇〇一）「(マク・ムト) ホッス(欲)」吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本

雅幸編『訓点語辞典』東京堂出版

柴田昭二・連仲友（二〇〇〇）「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究

報告』第一部一〇九

高橋敬一（一九八九）『今昔』における「ムト思フ」と「ムトス」について』『活水

日文』一九

田中雅和（一九九二）「和化漢文における「将・欲」と「可・当」等について——〈意志〉

の意味・用法を中心に——」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院

中山緑朗（一九九五）『平安・鎌倉時代古記録の語彙』東苑社

船城俊太郎（二〇一一）『院政時代文章様式史論考』勉誠出版

堀畑正臣（二〇〇七）『古記録資料の国語学的研究』清文堂出版

峰岸明（一九八六イ）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

峰岸明（一九八六ロ）『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版

峰岸明（一九九〇）「古代日本語文章表記における倒置記法の諸相」『国語論究2 文字

・音韻の研究』明治書院

峰岸明（二〇〇三）「古記録の文章における表記とその言語」『国語と国文学』八十ノ一

柳原恵津子（二〇〇五）「自筆本『御堂関白記』における「之」字の用法について」『日

本語学論集』一

山田孝雄（一九三五）『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』宝文館

山本真吾（二〇〇八）「変体漢文해의의 방법과 실제——変体漢文 訓点資料의 諸相——」『韓

国文化』四十四

山本秀人（一九九二）「久遠寺蔵本朝文粹清原教隆点の訓法について——助字の訓法を中心

に——」『鎌倉時代語研究』十四

吉野政治（一九八八）「官符の文体——而」字の用法について——

連仲友（二〇〇〇）「明月記における「欲」字の用法について」『鎌倉時代語研究』二十

三

### 【第三部第二章】

小林芳規（一九五九）「花を見るの記」の言い方の成立追考」『文学論藻』十四

佐藤進一（一九七二）『古文書学入門』法政大学出版局

鈴木恵（一九八〇）「日本靈異記古写本の比較に基づく文末の助字「也」「矣」字の用法」

『鎌倉時代語研究』三

高橋秀樹（二〇一三）『玉葉精読 元暦元年記』和泉書院

田上稔（二〇〇三）『曾我』伝本中の「誤用」例少々」『女子大國文』一三四

田中雅和（一九九八）「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」二種（漢字仮名交り文・

和化漢文）対照本文」『鎌倉時代語研究』二十一

橋村勝明（二〇一三）「聖藩文庫本『豆相記』に於ける「矣」字の用法について」『国文

学攷』二一八

峰岸明（一九九〇）「古記録と文体」古代学協会編『後期撰関時代史の研究』吉川弘文館

矢田勉（二〇一二）『国語文字・表記史の研究』汲古書院

柳原恵津子（二〇〇五）「自筆本『御堂関白記』における「之」字の用法について」『日

本語学論集』一

### 【第三部第三章】

網野善彦（一九九〇）『日本論の視座——列島の社会と国家——』小学館

乾善彦（二〇〇四）「擬似漢文生成の一方——『御堂関白記』の書き換えをめぐる——」

『文学史研究』（大阪市立大学）四十四

乾善彦（二〇一〇）「表記体の変換と和漢の混淆」月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古

典語研究の焦点』武蔵野書院

阪倉篤義（一九六六）『語構成の研究』角川書店

田中雅和・劉慧（二〇〇九）「前田本『三宝絵』における待遇の補助動詞について」『言

語表現研究』二十五

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

中丸貴史（二〇〇七）「漢文日記の生成——『後二条師通記』二つの本文——」『日本文学』

（日本文学協会）五十六ノ九

野村剛史（二〇一一）「カタカナ——発生から現在までの使われ方——」東京大学教養学部国

文・漢文学部会『古典日本語の世界（二）——文字とことばのダイナミクス——』東京大

学出版会

原裕（二〇〇一）「文章訂正例より見た『御堂関白記』自筆本の助字表記」『中央大学大

学院研究年報 文学研究科篇』三十

舩城俊太郎（二〇一一）『院政時代文章様式史論考』勉誠出版

堀畑正臣（一九八八）『御堂関白記』（古写本）に於ける文章改変態度について——「大殿」

と「某」の改変態度の差異について——『尚絅大学研究紀要』十一

三角洋一（二〇〇六）「和文と漢文の交流と漢文作品」三角洋一・松尾葦江・島内裕子『日

本の古典——散文編』放送大学教育振興会

峰岸明（一九八六）『国語学叢書11 変体漢文』東京堂出版

柳原恵津子（二〇一〇）『後二条師通記』冒頭三方年分の「本記」と「別記」について

月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古典語研究の焦点』武蔵野書院

## 【付論】

阿部猛（一九七二）『尾張国解文の研究』大原新生社

阿部猛（一九九六）『北山抄注解 卷十 吏途指南』東京堂出版

黒田彰（一九八七）「西野本仲文章 解題」『説林』三十五

小瀬玄士（二〇一四）「武士の文書作成——鎌倉時代の場合——」東京大学史料編纂所『日本

史の森をゆく——史料が語るとつておきの42話——』中公新書

佐藤進一（一九九七）『新版 古文書学入門』法政大学出版社

西村浩子（一九八七）「平安時代における解文の文章構成について——「尾張国解文」を中

心として——『国文学攷』一一六

西村浩子（一九八九）「真福寺本『尾張国解文』の対句表現について——文章構成との関連

において——『鎌倉時代語研究』十二

三木雅博（一九九四）「教訓書『仲文章』の世界（上・下）——平安朝漢学の底流——」『国

語国文』六十三ノ五・六

村上春樹（一九九三）『将門記』の文章「和漢比較文学叢書十五 軍記と漢文学」汲古

書院

山本真吾（二〇〇六）『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古書院

吉村茂樹（一九三二）「尾張国解文の成立についての一考察」『歴史地理』五十八ノ三

## 【結論第一章】

後藤英次（二〇一五）「平安時代の記録体の言語の基盤に日常口頭語があるとはどういうこと

か」『中京大学文学会論叢』一

佐藤喜代治（一九六六）『日本文学史の研究』明治書院

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

築島裕（一九七〇）「尊敬を表わす「シメタマフ」の成立について」『帯広大谷短期大学 紀要』八（人文科学・社会科学）

長沼英二（二〇〇五）「変体漢文語と和文語との相互流入——「執申／とりまうす」と「隠居・蟄居・籠居／こもりゐる」——」『記念論集 松籟 王朝の文学と表現』日本古典文学談話室

西田隆政（一九八七）「漢文訓読と中古国語——「かうぶる」と「かづく」をめぐる——」『訓点語と訓点資料』七十八

原卓志（二〇〇〇）「古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について」『鎌倉時代語研究』二十三

峰岸明（一九八六）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

## 【結論第二章】

苅米一志（二〇一五）『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』吉川弘文館

佐藤喜代治（一九六六）『日本文学史の研究』明治書院

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

築島裕（一九七〇）「尊敬を表わす「シメタマフ」の成立について」『帯広大谷短期大学 紀要』八（人文科学・社会科学）

長沼英二（二〇〇五）「変体漢文語と和文語との相互流入——「執申／とりまうす」と「隠居・蟄居・籠居／こもりゐる」——」『記念論集 松籟 王朝の文学と表現』日本古典文学談話室

堀畑正臣（二〇〇七）『古記録資料の国語学的研究』清文堂出版

矢田勉、清水康行、ジョン・ホイットマン、金水敏（二〇一一）『《座談会》言語資源としての日本語』『文学』（岩波書店）十二ノ三



## 要旨

本研究は平安時代における「変体漢文」の言語的性格を主として語彙と表記の観点から分析したものである。変体漢文とは、漢文の体裁を取ってはいるが種々の日本語的要素を活用することで日本語文を記したもので、万葉仮名や宛字を活用した「糸星<sup>ル</sup>見事無<sup>レ</sup>極<sup>ル</sup>」（Ⅱいとほしく見る事極まり無し）（御堂関白記）の如きがその一例である。こうした文章は奈良時代以前から見られるが、特に平安時代以降は貴族の日記や文書などに広く用いられ、日本史学の基本資料であると共に、日本語学上も貴重な資料となっている。

本研究は、序論・本論3部・付論・結論の6つの部分（計22章）から成る。

**序論**では、変体漢文の概要を資料・歴史・言語的特徴の観点から説き、且つその定義・分類を行う。変体漢文の定義・術語・分類は論者によって異なりがあるが、本研究では日本における「漢文」を（中国語ではなく）日本語の文語表記の一種と捉える橋本進吉の論に準拠する形で定義・分類を行う。またこれに関連して、「変体漢文」という術語をその創唱者である橋本がどのような意味合いで用いていたかを、彼の記述を基に再検討する。

また序論では、表記・語彙・文法・敬語・文体・音韻・資料等の観点から近年の変体漢文研究史を概観し、その課題を指摘する。

続く**本論**では、（い）「変体漢文によって書かれた言語はどのような特徴を持つか」と（ろ）「変体漢文はどのように書かれたか」という2つの問題意識に基づいて、平安時代を中心とする変体漢文における幾つかの現象を扱う。第1・2部が（い）、第3部が（ろ）の観点からの論考である。

**第1部「語彙より見たる変体漢文の性格（1）―文体間共通語への着目―**…従来、変体漢文の言語的性格を分析する方法としては、同時代の和文・漢文訓読文などにおける「特有語」の有無や多寡を指標とする（例えば、和文語系のサ系指示詞ではなく訓読語系のシカ系指示詞が主用されているので、当該文献は漢文訓読調である、という類）ことが多く、またその結果として変体漢文の言語は和文よりも漢文訓読文との共通性が大きいという認識が一般的であった。しかしながら、漢字に対する固定的な和訓（所謂「定訓」というものが原則として漢文訓読という営為の下で成立するのである以上は、その定訓というもの为基础として日本語文を綴る変体漢文においては、訓読語が不可避的に採用されることになるのではないか。つまり上述の例で言えば、変体漢文の記主にとってはシカ系指示詞ではなくサ系指示詞を記すという選択肢自体が剥奪されていた、と言えるのではないか。そうであるとすれば、特有語を文体判定の指標とすることにはある面、問題や課題がある

ことになる。

上の事情に基づき、本研究では新たな指標として「文体間共通語」（各文体に共通して用いられるが、語義や用法に文体間で相違がある語）を提唱した。そしてその具体例として動詞オドロク・アソブ・オク、形容詞ヒサシ、形容動詞ワヅカナリ・サカリナリの計6語を取り上げた（第2章〜第7章）。

一例としてオドロクを見ると、この語は和文では次のように〈驚き〉〈目覚め〉〈連絡〉の3用法が見られる。

〈驚き〉 貝にはかに吹き出でたるこそ、いみじうおどろかるれ。（枕草子）

〈目覚め〉 夜中ばかりなどうちおどろきて聞けば、（同）

〈連絡〉 七日七日の御誦経などを、人の聞こえおどろかすにも（源氏物語）

この3用法について、漢文訓読語では〈驚き〉が主用され、〈目覚め〉はごく僅かで、〈連絡〉は見られない。

一方、変体漢文では次のように3用法いずれも見られる。

〈驚き〉 子時許西方有<sup>レ</sup>火、驚<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>参<sup>天</sup>太内、（御堂閔白記）

〈目覚め〉 早旦参<sup>二</sup>御前<sup>一</sup>、未<sup>二</sup>驚<sup>レ</sup>御<sup>一</sup>、仍忽退出、（殿曆）

〈連絡〉 若無<sup>レ</sup>仰者、上卿可<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>驚<sup>奏</sup>者<sup>一</sup>、（九曆）

このことから、変体漢文における文体間共通語オドロクの用法は、漢文訓読語よりも和文語と共通するものであると判明する。こうした調査を上記の6語について行った結果、それらを総括して以下の如く結論した。

○変体漢文における文体間共通語の用法は、漢文訓読語よりも和文語と共通する傾向にある。

○但し、和文に見られる雅語的（和歌的）な語法までは、変体漢文は承けていない。

○以上より、変体漢文における文体間共通語の用法は「日常語」的なものと捉えられる。

また第8章では、上記が変体漢文に広く見られる傾向である一方、特定の資料や文書様式などにおいてはこれとは異なる様態を示す場合のあることを指摘した。

**第2部 「語彙より見たる変体漢文の性格（2） — 漢文訓読語的部分への着目 —」**…第1部での結論（変体漢文と和文との共通性）を踏まえて、改めて変体漢文における漢文訓読語の在り方を問うた。漢文訓読語（漢文訓読に特有の語彙）が、ある資料において用いられる場合には、それはその資料の漢文訓読語的な性格を示す要素であると従来捉えられてきた。これは一見尤もなことでありながら、実は漢字仮名交り文などにこれら漢文訓読語が用いられる場合に、語義・用法は漢文訓読文でのそれに則らずに独自の性格を示す場合が

あることが指摘されている。つまり、漢文訓読語の使用が本当に「漢文訓読語性」を示すものであるかはその語の用法まで確認しないことには判断できないのである。本研究では、漢文訓読語の内、形容動詞スミヤカナリと形容詞タヤスシを取り上げ、これらの漢文訓読文における用法と変体漢文における用法とを比較した。

調査の結果、変体漢文では、スミヤカナリは「速可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>召問<sub>一</sub>敷」（平安遺文）のように命令・義務等の表現と共に用いられ、タヤスシ「人輒<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>渡」（小右記）のように否定文の中で用いられるという顕著な構文上の特徴をそれぞれ持つが、漢文訓読文においては、両語はいずれもそうした特徴を有していないことが判った。つまりこれら2語は、漢文訓読文において用いられる（そして和文では基本的に用いられない）という意味では確かに漢文訓読語と言えるのだが、変体漢文におけるそれらの運用上の実態を見ると、実は「漢文訓読語性」を示すものではないことが明らかになった。更に、変体漢文における両語の用法は、和文における男性会話文での用法と共通すること等も指摘した。

第2部では変体漢文の中に見られる非和文的な語彙として、接尾辞の「等（ラ）」及び助動詞用法の「欲」の訓法と用法についても検討を加えた。「等」については、中古和文と中世和漢混淆文とのラの用法には断絶があり、中古変体漢文と中世和漢混淆文とはスムーズに繋がることを示した。「欲」については、訓点資料から、変体漢文においてはこの字はくムトス／くムトオモフという2つの訓を主に持つことが判るが、その2訓の使い分けについて、語義・人称・切れ続きといった観点から論じた。

**第3部「表記より見たる変体漢文の性格」**…先述の（ろ）則ち「変体漢文はどのように書かれたか」という問いに関わる2つの問題について取り上げた。

第2章では変体漢文における不読字（置き字）使用の実態について論じた。中国語文を日本語文に変換する（≪漢文訓読≫）際に訓みが与えられなかった、則ち日本語化に際して不要と見なされたパーツである不読字は、逆に日本語文を漢文式に書く（≪変体漢文≫）に際しても当然不要たるべきはずのものである。しかし実際には変体漢文には不読字が用いられており、その用法の一つとして、文章上の区切れを示すために用いられる句読点的な用法があることを指摘した。

本部第3章では（ろ）の問いに一層直接的に踏み込むために、変体漢文の形成論的研究の方法について論じ、その一例として「変換文書」を取り上げた。鎌倉時代の裁判文書は被告・原告の主張の根拠となる文書がその都度引用される形式をとるが、仮名文書を引用する際には漢字文に変換する処置が取られた。それら変換文書を変換元の仮名文書と対照した結果、「表記の主体は正訓字であり、万葉仮名の使用は補助的なものであること」や、「万葉仮名使用の多寡は、変換者の態度よりは変換元の仮名文が変体漢文化しやすいものであるかに関わる部分が大きい」等の特徴を指摘した。

以上の本論3部に加えて、付論として「尾張国解文は文書なりや典籍なりや―変体漢文資料の文体的解析・試論―」を置いた。これは語彙や表記上の特徴が変体漢文の通時的分析の指標として活用できることを論じたものである。尾張国解文は永延2（988）年発給の文書とされるが、10世紀後半の変体漢文文書としては異質な点（修辭・表記・語彙の3観点による）の存することを指摘し、現存の形になったのは12世紀以降ではないかと推定した。

**結論**では本研究の総括を行った。特に本論第1・2部の結果について、文体間共通語と漢文訓読語という異なる対象から、和文語／日常語との共通性という同趣の傾向が窺われることを指摘した。しかも上記の傾向は、いずれも語義・用法という、記主にとって変体漢文という体裁に由来する制約を受けない部分におけるものなのであって、そのような面で日常語的要素が採用されているという事実は、この要素を変体漢文の言語の基盤と判定する根拠となるのではないかと考えられる。変体漢文は漢文訓読語に基づく定訓／正訓字という「枠」に拘束されてはいるが、その内側（則ち語義・用法レベル）では自由に振る舞うことができた。但しその枠はただ表現を制限するだけのものではなく、漢語の活用や、和文における限定的な語義・語法からの解放などといった可能性を与えてくれるものでもあった。

以上は、変体漢文の言語について従来「漢文訓読調を強く帯びたものであって、和文語／日常語的な要素は周辺の・臨時的なものである」と見なされがちであったのに対して、斬新な知見を示したものと言える。